北村山地区の県立高校の具体的な設置計画に係る
「地域説明会」(大石田会場） 記録要旨

１　日　時　平成22年1月22日（金）19：00～20：30
２　場　所　大石田町福祉会館
３　出席者
　　地域の方々　30名
　　県教育庁　　高校教育課長、高校改革推進室長、高校教育課長補佐、
　　　　　　　　高校改革専門員、高校改革推進室職員
４　内　容　　　室長より概要説明後、質疑応答
５　質疑応答概要

（質問・意見）

今回の地域説明の出席者が少なく残念だ。地域説明会の開催は、どのような手立てで周知したのか。

村山農業高校の卒業生であるので、村山農業高校のことが最も関心があるが、村山産業高校（仮称）として、農業科、工業科、商業科を併設した高校を設置する計画は、最も自然体の高校再編整備であると感じている。

農業高校と工業高校が統合した新庄神室産業高校については、どのような評価をしているのか。農業と工業は異質な産業なので、校舎内で円満かつ円滑に教育することができるのか心配もある。

（県教育庁）

北村山地区の地域説明会の案内については、市町村教育委員会を通じて、北村山地区の全ての小学生、中学生、高校生の保護者に案内すると共に、市町村の広報への掲載、県政テレビ・ラジオにおける広報を実施したが、案内が皆さんのお手元まで行き届いていなかったとしたら、お詫びしたい。

新庄神室産業高校については、農工一体型で農工融合を目指すというビジョンで設置したが、農業科と工業科のそれぞれのよさを活かしきれていなかったという面があったと聞いている。最初に学校をつくった時に、農業科と工業科がばらばらにあるのではなく、一つの学校として生徒を育てていきたいということで、農業科と工業科の生徒が混在するクラス編成をしたが反省点もある。

現在、農業科、工業科それぞれが基礎をしっかり学習することを重視しており、その学習を基盤に他学科の学習をできるようにしており、成果も出てきていると聞いている。

県内初の農業科、工業科を併置した高校ということで、地域の産業界との連携を積極的に図っており、地域のニーズに対応した教育ができるよう取り組んでおり、地域の期待も高まっていると聞いている。

（質問・意見）

東根中高一貫校（仮称）の併設型中学校のイメージがわかないので説明して欲しい。例えば、入学定員は2～3学級としているが、「さんさんプラン」を導入するとすれば99名となるということか。既存の中学校との影響では、優秀な生徒は併設型中学校に入学してしまい、地元の中学校からいなくなってしまう心配はないのか。

（県教育庁）

併設型中高一貫教育校の設置は、本県では初めてのことなので、他県の成功例を調査し

ている。その中で、他県に多いのは、併設型中学校は、1 学級 40 名で 2～3 学級の設置が多い。

併設型中高一貫教育校のよさは、6 年間の系統的な教育ができ、入試に向けていた学習期間と高校入学後に中学校の学習の復習に当てていた期間を、体験的な学習やじっくり実験をする学習に当てたりすることができることである。

通学区域は、県内一円としているので、希望すれば県内どこからでも入学することができるが、北村山地区の生徒が中心になると考えている。

既存の中学校の生徒がいなくなってしまうのではないかという心配は、そういうことにはならないように考えていきたいが、他県では、中高一貫教育校設置後数年経つと、既存の中学校と併設型中学校がお互いに切磋琢磨できる環境になるようである。そうなるように、設置する市だけでなく、周辺市町村の教育委員会の理解と協力が必要であり、それがうまくいっている中高一貫教育校は成功している。

他県では、併設型中学校の卒業生が高校部分に進学しないで、他の高校へ多く進学してしまって、6 年間の系統的な学習がうまくいっていない例もあるので、そうならないように、高校部分の魅力が大切であると考えている。

（質問・意見）

少子化により中学校卒業生が減少するから高校再編整備をするというのは、一方的な見方なのではないか。村山農業高校は昔から、稲作、畑作、林業、養蚕それぞれの専門分野の教育を行い、地域の後継者を育成し今日までの百年の歴史に至っている。こうした長い歴史を持つ農業に関する教育をどのような見方でいるのか。

農業高校と工業高校が統合して誕生した新庄神室産業高校は、同窓会は 2 つに分かれている実態があり、校長は 1 人だが、教頭が 2 人いたこともあり、当時は 1 人は農業科で 1 人は工業科の教頭だったそうでちぐはぐな印象があった。

（県教育庁）

少子化による中学校卒業者数の減少は避けて通れない問題であるが、その減少に合わせて単なる数合わせでない高校再編整備であることは、村山産業高校（仮称）に商業科を設置したことからも御理解をいただきたい。農業も工業も「ものづくり」だけではなく、つくったものがどのようにして消費者の手に届くのかなど、消費者を念頭に置くことが大切になっている。農業の 6 次産業化といわれているように、産業の総合化に対応できる人材の育成について、山形県産業教育審議会においても議論がなされ、その答申も踏まえ、農業科、工業科、商業科を併置し、生産、加工、流通までを 1 つの学校で学べる環境の整備を目指し、今回の高校再編整備計画に至っている。

（質問・意見）

村山農業高校は、百年の歴史を持ち、職場や地域で同窓生も活躍している。そうしたことを考えると、単に生徒数が減るからというだけで、ことを進めるようでは、教育は百年の計と考えると残念なことだ。

村山農業高校同窓会が寄付を募って「耕道会館」を建設している学校について、ただ生徒数が減るからということだけ伝わってきて、本県の産業をどう見るのかということが伝わってこない。

農業教育をどう考え、農業の後継者をどのように育てていこうとしているのか。生産、から販売、流通までの学習は、現在の農業教育でもやっている。機械や加工に関することも農業の科目で学習することができる。なぜ、農業の専門高校として残すことができなか

ったのか。
（県教育庁）
村山農業高校同窓生の母校に対する思いは、村山農業高校で学ぶ生徒にとってありがたいことだと感謝している。
北村山地区の高校再編整備を考える場合、現在の農業教育がどうなっているのか、将来どうするのかということは重要なことである。本県行政でも農業を大切にして、後継者の育成をしっかり考えていかなければならないと取り組んでおり、これからの農業を発展させていくことができる高校をつくっていこうというのが、県産業教育審議会答申であると考えている。
農業は昔のように米だけつくっていればよいという時代ではなく、生産して、加工して、付加価値をつけて売るということが大切で、1 つの学校でそうしたことが学べる学校を考えた。農業科、工業科、商業科が併置することにより、工業科や商業科の専門の教員から機械やマーケティングに関することを学ぶことができる。
京都市のある商業高校は、長年、京都の商業に関する人材を育成してきた名門の商業高校であった。ところが、入学する生徒が減ってきて、同窓生の方々から、生徒のニーズに対応した学校にする必要があるということで、「孫から、すばらしい高校を卒業したね」と言われるような学校にして欲しいという要望が出された。それを受け、商業科を学科改編し大学進学に強い高校にして、京都の経済界を牽引することができるような学校づくりを進めている。
村山農業高校にはすばらしい伝統があり、山形県の農業を支えてきた学校である。その学校が、高校を卒業してすぐに農業に従事する卒業生は１％もいない状況にある。一方では、会社で働きながら実家の農業を手伝うという方も増えており、農業を学ぶ環境を今の時代にあった形でさらに発展させていきたいというのが、村山産業高校（仮称）の考え方である。
（質問・意見）
村山産業高校（仮称）、東根中高一貫校（仮称）の具体的な開校時期はいつになるのか。在校生の、新高校への移行はどうなるのか。中高一貫教育校には、大石田町からも入学できるのか、できるとしたらどのような手順になるのか。
（県教育庁）
現在、酒田市に設置する酒田新高校（仮称）の開校に向けて準備を進めているが、酒田新高校（仮称）を設置するという計画を公表したのが平成 17 年 3 月で、平成 24 年 4 月の開校を目指して取り組んでいる。7 年間かけて新しい学校が開校されることになる。
一般的に、教育基本計画の策定と敷地利活用計画に 2 年、校舎の設計に 2 年、建設に 2 年、合わせて 6 年かかると言われている。できるだけ早く開校したいと考えている。
在校生は、新高校に転学することにより、例えば、村山産業高校（仮称）の 2 年と 3 年生には、村山農業高校と東根工業高校の 2 年生と 3 年生が転学してくることになる。
東根中高一貫校（仮称）の学区は県内一円であるので、大石田町からも入学することができる。入学者の決定については、学力検査をしてはいけないことになっているので、適性検査、面接、作文、抽選等を組み合わせて入学者を決定するということを、他県ではやっている。
（県教育庁）
酒田新高校（仮称）は平成 24 年 4 月に開校するので、今年の高校入試を経て、酒田商業

高校、酒田工業高校、酒田北高校、酒田中央高校に入学してくる生徒が、酒田新高校（仮称）の第１回の卒業生となる。

（質問・意見）

東根中高一貫校（仮称）の通学区域が県内一円だとすると、尾花沢市にある鶴子中学校のように生徒が非常に少ない中学校の生徒が、中高一貫校に殺到して、既存の中学校から生徒がいなくなるということはないのか。

全県から入学してくることを考えて寮を設置する考えはあるのか。

（県教育庁）

既存の中学校から生徒がいなくなるということはあって欲しくない。東根市の設置に当たっては、一定数の中学生がいて将来にわたり中学生の数が減らず、交通の利便がよいところという視点で考えた。

「山形県中高一貫教育校設置構想」は、内陸と庄内に１校ずつモデル校を設置し、その成果をみて、将来的には、各学区に１校ずつ設置したいという計画であり、寮の設置は考えていない。

（質問・意見）

都内の中高一貫教育校では、5年間で中学校と高校の教育内容を終えて、最後の1年は大学受験のための学習に力を入れている学校もあるようだが、そうした場合、内進生と外進生の進度の違いにどのように対応していくのか。

（県教育庁）

全国に中高一貫教育校は約370校あり、成功例も失敗例もある。成功例を参考に本県では、併設型中高一貫教育校の設置に取組みたいと考えている。中高一貫教育校の内、約20校が中等教育学校と呼ばれるもので、6年間同じ生徒で学んでいくので、併設型に比べ、6年間の系統的な教育が可能とされているが、人間関係が固定化してしまうというデメリットもある。

併設型中高一貫教育校の内進生と外進生に関する配慮については、他県の事例では、3つのパターンがある。

1つは、併設型中学校で高校の学習内容の「先取り学習」をやっており、高校部分で、内進生と外進生を違うクラス編成をして対応している学校である。2つめは、併設型中学校では「先取り学習」をせず、体験学習や実験に時間を多くとり、高校部分は内進生と外進生を同じクラス編成をしている学校がある。3つめは、高校部分の1年生のみ内進生と外進生を違うクラス編成にして、1年生の時に学習の進度調整をして、2年生から内進生と外進生いっしょのクラス編成をしている学校である。

これから設置する中高一貫教育校は、本来6年間かかる教育内容を5年間にするという考えはなく、じっくり実験に取り組ませたり、豊かな体験活動を充実させたいと考えている。

（質問・意見）

村山農業高校同窓生も新庄市内だけで100名いるが、このような地域説明会は、最上・新庄地区でも開催されるのか。

高校統合に関して、村山農業高校同窓会と東根工業高校同窓会の調整は県でしてもらえるのか。

（県教育庁）

来年度から最上地区の高校再編整備について検討する予定であり、最上地区での説明会

は、来年度に実施する予定である。ただ、今回の北村山地区の高校再編整備について、最上地区で地域説明会をするということは予定していない。

酒田新高校（仮称）の場合、同窓会のことは、4 つの同窓会同士で、今後のことを話し合ってきた。村山産業高校（仮称）の場合も、村山農業高校、東根工業高校の同窓会同士が話し合って、今後のことを考えていくのが 1 つの方法だ。ただ、卒業生が成績証明書などを取得する場合の手続きに関しては、卒業生に不利益にならないように手立ては講じるつもりである。

（質問・意見）

地元の北村山高校には、商業に関する系列があるが、村山産業高校（仮称）に商業科を設置することにより、北村山高校の商業に関する教育はどのようになるのか。

（県教育庁）

北村山高校は、平成 23 年に 1 学級減になる予定で、その時どのように教育内容の変更が必要かということを、北村山高校の先生方に検討してもらっている。

県の考え方は、情報を中心に商業に関しても学べるような系列を設けてはいかがかということと、さらに北村山高校の教育内容の充実を図るため、衣食住が学べるなど生活産業に関する系列を充実させるなど、東根工業高校生活クリエイト科の「ＤＮＡ」を北村山高校の中で活かして欲しいと考えている。

県としては学校の大きな枠組みは示すが、その学校が成功するか否かは、その学校にいる先生方が生徒のためにこのようにしたい、こういうカリキュラムにしたいという考え方が大切であると思う。北村山高校の教育の充実のために先生方が知恵を出し合って生徒達のために一番よいカリキュラムを作って欲しいと考えている。

（県教育庁）

東根工業高校生活クリエイト科はこれまでがんばってきたので、培われてきた伝統が北村山高校でどのような名称の系列になるかはわからないが、よい形で北村山高校で引き継いでいければよいと考えている。

以上